

## ジェンダーとセクシュアリティをめぐるフィールドの権力関係

熱田敬子（茨城県立医療大学・早稲田大学）

### 1 目的

従来、フィールド調査での権力関係をめぐる議論は、主として調査者がフィールドで出会う人々を侵害するという点に焦点があてられてきた。しかし、調査研究や執筆、成果発表にともなう調査者の権力性とは別の次元の、フィールドでの生身の人間関係においては、調査者が弱い立場におかれることもある。ことに、キャリア初期の若手研究者、社会調査実習の学生などが調査者としてフィールドに入る場合には、調査者の社会的な立場の弱さ（若年であること、社会経験の少なさ、ジェンダー性、経済的に自立していないことなど）が、フィールドでの人間関係に反映されてしまいがちだ。

その際、調査者がどのように不測のハラスメントや、フィールドで出会う人々からの侵害をさけているのかという問題は、インフォーマルな体験談としては共有されてきたであろうが、公に論じたものは日本では極めて少ない。今後、経験の公開と蓄積が望まれる分野である。

本報告では、調査者が「女性」というジェンダー性をもつ存在と見なされるケースを例にとり、フィールドで出会う人々や、共同調査者との関係について検討していきたい。

### 2 方法

フィールドワークやインタビューに基づく先行研究、および報告者の経験した事例などから、調査協力者との間にジェンダー性による権力関係の非対称が生じたケースを検討する。その上で、セクシュアル・ハラスメント等の文献を参照し、そのような非対称が調査者にとってどのように解消可能／不可能なものなのか、また解消できなかつた場合起きうる可能性について議論する。

### 3 結果

フィールドで出会う人々は、調査者を調査者である以前に、女性や男性、またはセクシュアル・マイノリティの当事者等と見なすことが多い。それはある意味当然のことであるが、調査者の予想を超えて性的な対象として見られてしまった場合、対応を誤れば調査の続行自体が危機にさらされることになる。性的アプローチも、丁寧な拒絶で対応できるものとばかりは限らない。ことに女性に対する男性の性的アプローチにおいては、多少の攻撃性や強引さが許容されると思われやすい。

さらに、フィールドワークやインタビューの手法では共感的な傾聴が推奨されている。相手の話に異議を唱えず、思いやりを持って耳を傾けるという態度は、調査研究の文脈を離れ、社会的なジェンダーをめぐる思い込みの中におかれた時、女性が男性に好感を持たれるためにとるべき望ましい態度とされるものと重なりうる。このため、調査研究としての興味と、個人的な興味が不分明になる時（生身の人間を対象にした調査では頻繁に起こりえる事態だ）、調査者の態度が異性への好意、もしくは「女性」としての好ましさと捉えられてしまうことがあり得る。さらに、個人的なストーリーを語ること自体が、親密さを深める好意だと社会一般に思われていることも、この傾向を後押しする。

### 4 結論

男性ジェンダー、女性ジェンダーのどちらにおいても、非対称な関係で弱者となることはあり得る。しかし、こうした状況から、「女性」調査者にとって、性的な問題にどう対応するかというのは一つの大きなテーマであることは間違いない。個別の対応方法と議論が蓄積され、学生指導やキャリア初期研究者の参考となることが求められる。